生命（いのち）のにぎわい調査団

生命（いのち）のにぎわい通信

第 51 号：発行　令和元年（2019 年）7 月

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター

〒260-8682　千葉市中央区青葉町 955-2
（千葉県立中央博物館内）
TEL 043-265-3601　FAX 043-265-3615
URL http://www.bdcchiba.jp/monitor/
E-mail monitor@bdcchiba.jp

千葉県のトンボ （トンボの仲間）

夏の水辺を彩るトンボ。47 号で紹介したイトトンボの仲間につづき、今号ではトンボの仲間（不均翅亜目（ふきんしあもく））を取り上げます。姿かたちや色彩も豊かな千葉県の様々なトンボの仲間を紹介します（写真右下は撮影者の団員番号, 種名の右の「県」は千葉県のレッドデータブックのランクです）。

ギンヤンマ
全長 65 ～ 84mm
平地から丘陵地の開放的な池沼や川、人工池などに生息。交尾を終えたペアは連結状態のまま浮葉や枯死植物に産卵。幼虫期間は 1 年未満。

ウスバキトンボ
全長 44 ～ 54mm
平地から山地の湿地などに生息。毎年東南アジアから季節風に乗って日本に飛来。世代交代しながら北上し死滅。幼虫期間は 1~2 ヵ月。

チョウトンボ　県：D
全長 31 ～ 42mm
平野から丘陵の水生植物が繁茂した池沼などに生息。美しい黒い翅をもち、チョウのように飛翔する。幼虫期間は 1 年程度。

オニヤンマ
全長 82 ～ 114mm
平地から山地の樹林がある河川上中流域に生息。日本最大のトンボで 10 ㎝を超える。雌雄ともに黒と黄の縞模様。幼虫期間は 3 ～ 4 年。

ヤマサナエ　県：D
全長 34 ～ 48 m m
丘陵地から山地の河川上中流域や用水路に生息。キイロサナエによく似るが、胸部と腹部の斑紋で区別できる。幼虫期間は 2 ～ 4 年。

コシアキトンボ
全長 24 ～ 34mm
平野か丘陵地の周囲に樹林のある池沼などに生息。全体が黒色で、腰上部が白い。電気トンボとも呼ばれる。幼虫期間は半年～ 1 年。

ネキトンボ　県：A
全長 38 ～ 48mm
平地から山地の樹林に囲まれた池沼に生息。翅の付根が燈色のアカトンボ。県内の産地は局所的で、保全が望まれる。幼虫期間は 3 ～ 9 ヵ月。

マイコアカネ　県：D
全長 29 ～ 40mm
平地から丘陵地の水生植物が繁茂する池沼や水田などに生息。顔面が青白く体が赤いので舞妓の由来となった。幼虫期間は 5 ヵ月程度。

ノシメトンボ
全長 31 ～ 48 m m
平地から山地にかけての池沼や水田などに生息。代表的なアカトンボであり、羽の先端に褐色斑がある。幼虫期間は 5 ヵ月程度。

最新の生物多様性に関する情報、各種講習会の情報は、当センターと調査団のホームページをご覧ください
「生物多様性センター」http://www.bdcchiba.jp/　「調査団」http://www.bdcchiba.jp/monitor/index.html

古典文学と里山の生きものたちの世界

第五回　ヒグラシ *Tanna japonensis* カメムシ目セミ科

詩人　大島　健夫

日本の古典文学には、様々な生きものたちがいろいろな形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生きものとかかわり、その姿に何を見ていたのでしょう。この連載では、昨年度から生物多様性センターに嘱託職員として勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、生命(いのち)のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

夏から秋の夕方、カナカナカナ・・・と鳴く中型のセミ・ヒグラシ。文学の世界で、その声は昔からはかなさや哀愁を帯びたものとして描かれてきました。

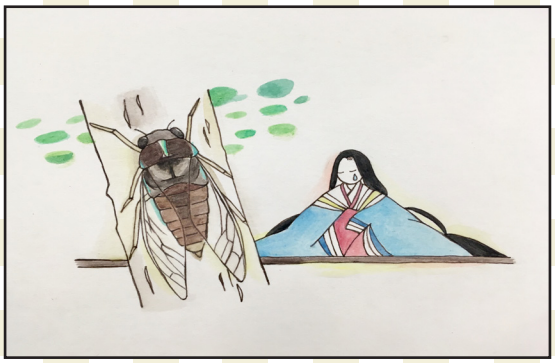
平安時代中期に紫式部により書かれた長編小説『源氏物語』にも、いろんな形でヒグラシの鳴き声が使われています。第三十五帖『若菜下』では、主人公の光源氏が、病に伏している正妻の女三宮を見舞ううちに眠ってしまい、ヒグラシの鳴き声で目覚めます。（第二夫人の紫の上のもとに）帰ろうとする源氏に、女三宮はこんな歌を詠みます。

夕露に　袖ぬらせとや　ひぐらしの　鳴くを聞く聞く　起きて行くらむ

ヒグラシの鳴くのを聞きながら行ってしまうのね、私にはここで梅雨に袖を濡らして（泣いて）いろというのね、というのです。帰りにくくなってしまい、困った挙げ句の光源氏の歌がこれ。

待つ里も　いかが聞くらむ　方がたに　心騒がす　ひぐらしの声

私を待っている紫の上はこの声をどんなふうに聞いているだろうか、それぞれに心を騒がすヒグラシの声ですね、と・・・。



作　石田　理紗

この第二夫人・紫の上という女性は、10 歳くらいの幼女だったのを、「初恋の人に似ている」という理由で光源氏が誘拐してきて自分好みに養育した人で、物語を通じて容姿内面ともに優れた人物として描かれ、源氏に深く愛されながらも実子を持つことなく、葛藤を心に秘めて生き、ついに出家を望むものの許されず、源氏に先立って病没します。また一方の、源氏よりも 26 歳も年下であった正妻・女三宮はやがて愛人との子を産み、こちらは本当に出家するなど数奇な運命を歩んでいきます。ヒグラシの鳴き声は、まるで光源氏と彼をめぐる女性たちの人生の BGM のようにも思えます。

＜これからの季節に観察できる生きもの＞

○調査対象種：セミの仲間、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、サワガニ、ヤマユリ、オオフサモ（外）

○調査対象種以外

＊渡りのシギ・チドリ類、サシバなどの猛禽類

＊各種昆虫（とくにトンボ・チョウ）

両生類、爬虫類など

＊希少生物（生息・生育数が減少している生物）

外来生物の報告も受け付けています。

＜令和元年度第 1 回現地研修会を開催しました！＞

6 月 13 日（木）に NEC 我孫子事業場にて現地研修会を開催しました（参加者 23 名）。NEC と地元の手賀沼水生生物研究会が連携し、企業敷地内の池を活用して絶滅危惧種のオオモノサシトンボ（千葉県 RDB（以下、県）：A）やゼニタナゴ（県：X）を保全している現場を学びました。

普段は入れない企業敷地内だけあって、参加者は熱心にスタッフの説明に耳を傾け、アオヤンマ（県：B）、チョウトンボ（県:D）などの希少種も観察できて、大変有意義な時間を過ごしました。